

## 2. 諫早湾貝類の漁場有効利用技術開発(アサリ)

松田正彦・木村和也\*

### I. アサリ生理状態調査

#### 方法

調査は、諫早市小長井町の2つのアサリ漁場(A, B)で、平成28年4月8日～平成29年3月28日に行った(図1)。調査頻度は大潮毎の概ね月2回とした。



図1 調査位置図

A, B 漁場の地盤高 1m 程度に設けた定点周辺で採取した殻長 30~40mm の商品サイズのアサリ各 20 個体を試料とした。

試料は殻長、殻高、殻幅、重量を測定後、軟体部と殻に分け、軟体部表面の水分を十分取り除いて軟体部の湿重量(以下湿重)を求めた。また、軟体部および殻を 60°C、48 時間乾燥し、それぞれ乾燥重量(以下乾重)を求めた。

乾燥身入率は軟体部乾重を軟体部乾重と殻乾重の和で除し、百分率として求めた。

水分は軟体部の湿重と乾重の差を湿重で除し、百分率として求めた。

なお、乾燥身入率は成熟と栄養蓄積状態の、水分は栄養蓄積状態(低ければ良好)の指標と考えられる。

#### 結果

A, B 漁場の定点周辺のアサリの乾燥身入率と水分の平均値の変化を図2に示す。

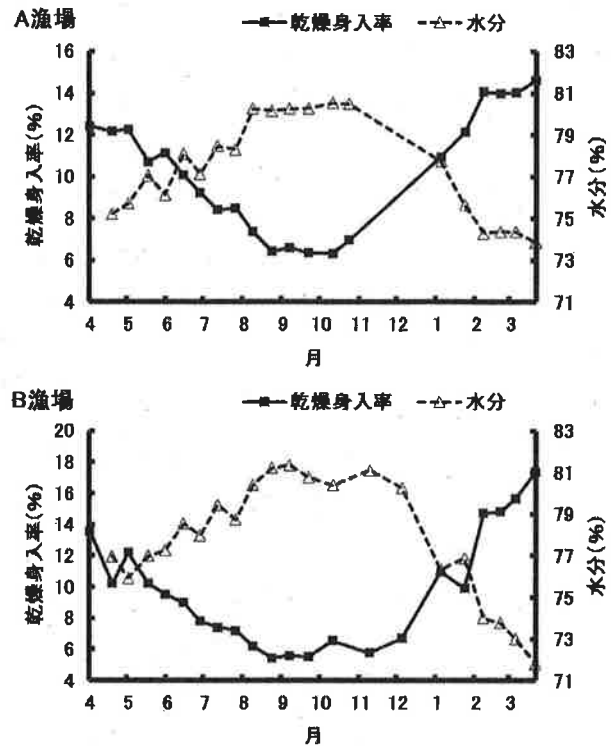


図2 各漁場の乾燥身入率と水分の推移

調査開始当初の平成28年4月8日の乾燥身入率はA 漁場が 12.4%、B 漁場が 13.6%であったが、同年8月31日にB 漁場で最小値の 5.4%、10月18日にA 漁場で最小値 6.3%となった。平成29年3月28日にはA 漁場が 14.6%、B 漁場が 17.4%となった。

水分については、平成28年4月26日にA 漁場が 75.2%、B 漁場が 77.0%であったが、同年9月14日にB 漁場で最大値の 81.4%、10月18日にA 漁場で最大値 80.5%となった。

平成29年3月28日にはA 漁場が 73.9%、B 漁場が 71.8%となった。

\* (株)日本ミクニヤ

## II. カゴによる生残状況調査

### 方法

調査は、諫早市小長井町のアサリ漁場 C (図 1) の地盤高 1m 付近で殻長 23.5mm のアサリ 1kg をポリエチレン製のフタ付カゴ (約 0.12m<sup>2</sup>) に収容し、平成 28 年 6 月 2 日～平成 29 年 2 月 7 日に行った。

生残状況の確認は月 1 回とした。

### 結果

カゴ内のアサリ生残率の推移を図 3 に示す。

調査終了時の平成 29 年 2 月 7 日の生残率は 29% であった。試験を開始した 6 月～11 月までに生残 30% まで低下したが、それ以降はほとんどへい死もなく生残は安定していた。夏季～秋季のへい死については今年度の夏季の高温、梅雨時期の低塩分や 8～9 月に発生した有害種シャットネラによる赤潮、前述の生理状態調査結果から餌料環境悪化による衰弱などの複合的な要因が推察された。

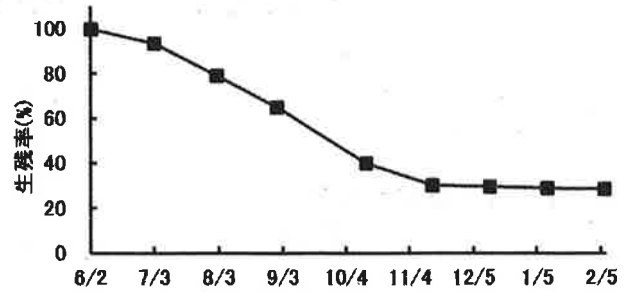


図 3 アサリ生残率の推移

### まとめ

- 1) 諫早市小長井町の 2 漁場でアサリ (殻長 30～40mm) の乾燥身入率、水分および試験カゴによる生残状況調査を実施した。
- 2) A 漁場では平成 28 年 10 月、B 漁場では同年 8 月に乾燥身入率が最低値となった。
- 3) 平成 28 年 6 月に開始した生残状況調査では同年 11 月までに 70% がへい死した。

(担当：松田)